

## 【佳作】

## 心と対話する

下島 歩海（東京都 田園調布学園中等部 2年生）

自分を知っている人が周りに誰もいなかったら、ルールに反することを私はするだろうか。答えは「いいえ」だ。でもなぜしないのかときかれたらすぐに答えるのは難しい。宣教師ベラスコなら「主イエスがご覧になっていてるから」と答えるかもしれない。私は特に何かの神様を信じているわけではない。日本人の多くがそうかもしれないが、お正月には神社にお参りをし、お盆にはお墓参りをして、クリスマスにはプレゼントをもらったりする。その時、宗教的な意味を考えたりはしない。

そんな私が宣教師ベラスコと出会ったのは、遠藤周作の「沈黙」がキャラ神父という実在の人物をモデルにしていることを歴史の授業で知ったことだ。基督教への断崖や日本人の宗教観という同じテーマで書かれた「侍」は、その主人公が両親の出身地仙台に縁がある支倉常長であることで、さらに興味を持ったのだ。

江戸時代初期、幕府が直轄領での基督教を禁じて間もない頃、ノベスパニアとの交易を開くため藩の使者として太平洋を渡る侍たち。通訳で宣教師のベラスコと彼らは、航海の成功という同じ大きな目的に向かってはいるはずなのに、気持ちは離れたままだっ

た。侍たちには基督教が理解できなかった。イエスの存在意義がわからなかったのだ。それはなぜか。

理由の一つは、宗教に求めるものが違うことだと思う。歴史で習ったように、日本人は疫病や災害から逃れ、戦の勝利を願うために神仏を拜んできた。船に同乗した商人たちは基督教が交易に有利になるというベラスコの言葉は信じたけれど、基督教そのものを信じるようになったわけではなかった。日本人は宗教にこの世での利益を求めるのに対して、西洋人は祈りによって魂が救われることを求めるのだ。

もう一つの理由は、基督教が個々の祈りが基本なのに対して、日本では家や村や藩という組織を守ることが大事だとされてきたことだ。侍たちが辛さに耐えて使命を果たそうとしたのは、先祖伝来の豊かな土地を殿様から返してもらえないかもしれないという一族の願いを背負っていたからだ。ベラスコと論争した神父ヴァレンテは、「改宗させようとする『彼』という一人の人間は日本にいなかった」と言っている。つまり「自己」を持たない日本人が、個人の宗教である基督教やイエスの存在を理解することは不可能だったということだ。

西洋人にとって神様を信じるということは自己を見つめるということなのではないかと私は思った。神と対話することによって実は自分自身と会話しているのではないだろうか。ベラスコは何度も神に語りかけているが、神の声は記されていない。すべての望みが消えようとしているとき彼の耳にきこえた哄笑は、司教の地位を得たいという野心や虚栄心を持ち、日本人を巻き込んでしまったことに対する報いを受けた、自分自身へのあざけりの笑いだったのではないだろうか。

七年間の旅を終えようやく日本に帰った侍は、実は世界のどこ

も何も変わりがなかった、自分が見てきたものは結局、権力と利益を求める人間の業だったと振り返る。藩や幕府も自分を裏切った。そして、個人と神との関係で成り立っているはずの基督教なのに、組織としての基督教も実は政治の世界から逃れることはできないのだ。ここで彼は初めて基督教徒にとってイエスがどのような存在なのかということを悟り、「人間は心のどこかに生涯共にいてくれるもの、裏切らぬもの、離れぬものを求める願いがある」と語る。そしてベラスコは最期に、「私はとにかく生きました」という言葉を残した。運命にただ従って生きた侍と、周りを巻き込んで烈しく生きたベラスコ。正反対の生き方をした二人が私に教えてくれたのは自分自身の声に耳を傾け、自分を裏切らないよう精一杯生きるとのことだ。そしてこのことに宗教は関係ないのではないかと思った。

小学生のときに見たサン・ファン・パウティスタ号の復元船。金色のアラベスク模様の美しく大きなあの船は、華々しく希望に満ちた旅をしたわけではなかった。しかしベラスコや侍はあの時代精一杯生きて、今ここにいる私に大切なことを気付かせてくれたのだ。

自分を裏切らないように生きるとは難しい。一人でいるときに自分の心の声を聞くことはできる。しかし集団の中では誰かの声にかき消されてしまうことがある。勉強をしているとき、自分のためにならないという声が聞こえているのにそれを無視して安易な道を選んでしまうこともある。でもこれからは二人が教えてくれたことを思い出すだろう。どんな時も自分を律したり、励ましたりする自分自身の声をしっかりと受けとめて正面から向き合おう。

書名…侍  
著者…遠藤 周作